です。」このように聴きましたが、これは味わうべきことばだと思います。

○

ここになんのへだてもなく、私事について語りあって、なんの秘密のない生活、これこそ大きな喜びであろうと思います。

私は朝に夕に「お早ようございます。」「さようなら。」の挨拶が、明るく大きく響くことが楽しいのです。

○

この職員室にある先生たちは、いつも園児のことで頭がいっぱいになっていられると思います。だからかなり疲労もあろうがけっして悲鳴をあげないし、たまたま帰園がおそくなっても超然としているのです。私などあくびをかみしめたり、帰園を急いだりすることがあってはずかしいことだと思うのです。

それに、みんなが明るくみだしなみがよく幼児に接する心がまえがなかなかよいのです。

○

つまらない雑感ですが、こんな平凡なことが、あんがいたいせつなことではないでしょうか。

私は職員室の生活を楽しみ、問題があれば職員室にきて解決し、楽しみも苦しみも先生たちみんなでわかちあうようにありたいと思うのでございます。

この精神からきっと英気がうまれ、教育への道が歩まれて、幼い子どもたちの双葉の芽をのばすことができるのではないでしょうか。

（幼稚園教諭・東京）

私の宿題

穴井曜子

「おいらの部屋だよ、おいらの部屋だよ。」ひょうきん者のMちゃんは、おどけた身振りで部屋中を踊り歩きました。この二学期になってはじめて、子どもたちと私は、おちついた保育室をいただいたからです。ほんとうは私だって一しょにうかれたくなるくらい嬉しいのです。

この四月に入園した一年保育の二組は、保育室がないのでずっとホールを共有してきました。あまり大きくないホールなので、ついぞ立てしきった半分をお互に一杯に使うことになるのでついおとなりをのぞきたくなります。

何をしていてもおとなりで歌いだせば、せめて一しょに歌うより他ありません。ついたてのかげからお手洗にいく子がぞろぞろやって来れば、こちらもそういたします。それに毎朝全園で礼拝その他に使うホールは、何となく自分たちの部屋という感じがしません。

全然コントロールされていない、ありあまる精力を内に秘めたまま雑然とした環境におかれた一年保育児はこうしてだんだんおちつかない子どもになってきたようです。みんなの迷惑になるからというので、毎朝数人の子が出されますが、それはいつでも、きまってこの一年保育の男児です。何とか少しおちつかせるようにというので、とくに手に負えない私の組が、二年保育年少組とお部屋をとり

かえてもらった、というわけですからあまり名誉なことではありません。今日も私の組の子が二人、とうとう物置に入れられてしまいましたが、子どもたちが帰ったあと私は、ぼんやり考えこまずにはいられませんでした。こんなふうになったのは、いったい誰の責任だろう？　いつも子どもたちだけが責任をとらされるが、それは不当なことではないかしら？　もし教師が託された子どもの実体を正確に捉えて、ひとりひとりの欲求を満してやることができたら……あのあり余っているエネルギーを上手に発散させてやることができたら……そして何よりもひとりひとりの子どもに、おちついた場所をじゅうぶんに与えてやることができたら……。

タンポポは、葉を大地にしっかりと拡げることによって、自分に必要な場所を確保し、平凡だが健康な花を太陽に向って開く……子どもだって同じことです。

しかし現実は、余りにきびしいようです。安い月謝、狭い園舎、不足している保育室、多すぎる園児、そして何よりも無経験で無力な教師としての私自身。二年間（けっして長い期間ではありませんが）。私たちが真剣にとりくんだ問題は、〝いかにして幼児の成長を助けるか〟ということだったのですが、今現実の場におかれた私は、あまりにも無力な自分を直視して惨めな気持にならざるを得ません。

何とかしてひとりひとりを伸してやりたい、よい経験をじゅうぶんに与えてやりたいと、あせるばかりで、きびしい現実の制約の前に、戸惑うばかりです。実際問題として、子どもはすでに私の前にあるのですから、苦しみは切実です。しかし、限られた中で、できるだけのことをするより他ありません。たえず勉強し、工夫し試みることによって障害をのり越えてゆく、これこそ私に与えられた大きな宿題だと思うのでございます。

（幼稚園教諭・埼玉）

保育者の喜び

樋口伊都子

そのことが実に素晴しいもので、ある、と感じられるようになるまでに、私たちはこんな経験を通りこして、はじめて最上の喜びを知るようになるのではないかと思う。何かによる失敗が、彼を絶望に近い深淵に立たせることもあるだろう。また、若い彼の理想も、たちまち失望にとって変って彼を打ちのめしてしまうかもしれない。いや、完全なものとの対照から、未熟な彼は強い劣等感、恐怖心に縛られる。しかし、彼はそのままではいない。ほんの僅なチャンスが彼を生き生きと、力強く蘇生させる。

それについて、私はこんな例を経験した。何もかもすべてが新しく、珍しく感じられたあの当時、学窓を巣立った雛鳥の私は、無我無中でそこここにとびまわり、さまざまなことを吸収するのに精一パイの日々を送っていた。まったく喜びも悲しみも、ゆっくり味っている暇はない。いかなる場合でも同じこと、やがて慣れることから落着き、考える余裕ができてくる。まず、反省が誰の胸にもうかんでくる。明日への進歩のために考えなければならないことだからだ。私の反省、それは保育室で忙しく過してしまうさまざまな場面、子どもたちとの交渉態度、すべてが望ましいものであったかど